

富山県の縄文土器編年

とっておき埋文講座②

富山県教育委員会生涯学習・文化財室 主幹 島田 修一

はじめに 編年とは

「編年(英訳:chronology)」とは、あまり馴染みの無い用語ですが、まさに字のごとく年代を編むことです。

通常、この言葉が使われるのは、考古学の分野がほとんどだと思います。考古学では、遺構や遺物の新旧関係や年代を秩序立てて配列する作業のことを「編年」と呼んでいます。

編年は、考古学研究に不可欠な秩序ある時間軸の指標です。時代が新しくなると文字や写真、絵画など様々な史料がありますが、こうした記録資料がない先史考古学では、出土品をもとに「いつ、どこで」の基準づくり、歴史的な時間の設定を行う編年研究そのものが、重要な基礎研究となっています。

層位学的研究と型式学的研究

考古学における年代には、相対年代と絶対年代の2つの年代があります。相対年代とは、資料AとBでは「AがBより古い」というように相対的な新旧関係で表される年代です。一方、絶対年代とは、「今から3,000年前」などと具体的な数値で表される年代です。

考古学では遺構や遺物の年代を検討し、決定する場合に相対年代を基本としています。この相対年代を決定するために、層位学的研究と型式学的研究の2つの方法が用いられています。

年代を検討する場合、まず、層位学的研究がベースとなります。層位学的研究とは、遺物を含む地層の上下関係や新旧関係、遺構の切り合い(重複)関係等によって遺物の年代の新旧関係を決定する方法で、遺物を含む地層が攪乱を受けずに上下に重なって堆積している場合は、下層が古く、上層が新しいという地質学の「地層累重の法則」に基づくものです。

一方、型式学的研究とは、考古資料を分類して「型式」と呼ばれるグループを設定し、その型式を一定の原理に従って年代的に配列する方法で、生物学の考え方、ダーウィンの進化論や痕跡器官の概念を援用した研究方法です。

考古学に置き換えて考えると、土器など人類が作り続け、使い続けた道具は、長い間に必ず形態や装飾が一定の方向性をもって変化を遂げていくことに着目して、そうした道具(遺物)の変化の正しい序列を見定めることによって、遺物の時期差、つまり時代の変遷を探るための基準をつくるという考古学の基礎的な研究法です。要するに、一定の方向性をもって変化していく道具の形態や文様の特徴によってグループ分けを行い、そのグループごとに時間差を設定しているというものです。

ここで、皆さんよくご存じの新幹線を事例にモノの変化のあり方を見てみましょう。例えば、東海道新幹線は一番古い0系から最新の700系まで数十年ごとに形や模様を変えていっていますが、誰もが東海道新幹線に共通して抱く形や白と青を基調にした模様は、ずっと受け継がれています。

一方、上越・北陸新幹線も200系から2階建てのE系へと変化し、今では北陸新幹線E7系となっています。一つ一つ形も色も違うのですが、変化の方向性に共通したつながりが見えてきます。ここで言う、例えば100系とかE系というのが一つの型式にあたり、東海道新幹線とか上越・北陸新幹線が、系統を別にする、共通した雰囲気をもった複数の型式群



のまとまりとなります。(この大きなまとまりを様式と呼ぶ研究者もあります。)

こうした型式ごとの系統的な変化のあり方を追求して、年代的な序列を定めていこうというのが、型式学的研究です。考古学における土器型式の研究実践では、たくさんの土器群から、まず形の共通するものを選別してグループ化します。次いで、各グループ内で共通する文様を持つものを抽出して、形と文様の組合せによるグループを作ります。このグループごとの系統的な変化を、層位学的な考え方も含めて年代的な新旧関係の判断や、変遷のあり方の検討を繰り返し、時間軸を編み上げていく作業を行っています。

縄文土器の型式設定のポイント

縄文土器は基本的に煮炊き用の容器と考えられています。煮炊き用の器であるにもかかわらず、複雑な形をしていて、使用するにはかえって邪魔になる華美な装飾、文様が描かれています。けれども、それを手がかりに私たちは、型式学的研究を用いて縄文土器の移り変わりを詳細に探ることができます。

縄文土器の編年は、先にお話したとおり、形や文様の組み合わせ、器種の構成や製作技術、文様などの特徴を捉えて細かく分類・グループ化したものを配列していく作業です。遺跡や地域ごとに年代的な序列を編成し、編年表にまとめることで、その地域の縄文土器の推移や時代区分を明らかにすることができます。ただし、注意が必要なのは、編年表はあくまで型式の移り変わりを基準にした研究者の便宜的な年代区分であって、文化的変化を表す指標ではないということです。

では、型式設定の考え方、そのポイントについて見てみましょう。実際に発掘調査等で発見される土器は、ほとんどがバラバラに壊れた破片の状態です。接

合・復元を行っても、ひとつの遺跡の出土品だけで全容を知り得る個体は、さほど多くはありません。そこで、別の遺跡で出土した共通する特徴を持つ土器群を含めて「この土器はこんな形でこんな文様に違いない」という想定をもとに理論的に全体像を復元し、比較・検討していく必要があります。

ここで大切なのが、資料の選択です。発掘調査では、遺跡全体を覆う土砂や、住居跡などの中から膨大な数の土器が出土しますが、型式設定の要となるのは、竪穴住居の炉内に敷き詰められたり、意識的に地中に埋設され、棺として利用されたと考えられる、まさにその住居や墓が利用された年代を端的に示す土器群です。これらを一括資料として特定・抽出することが重要です。

次のポイントは、土器の形や文様の意匠や施文手法などの系統的な変化の方向性を正しく捉えることです。縄文土器の文様に見られる特徴は、時期や地域ごとに共通し、比較的短期間（と言っても数十年から100年の幅はありますが）のうちに変化していきます。その変化の方向性は、そのグループ（型式）を特徴づける意匠が、発生し、盛行し、やがては衰退していく傾向にあります。これは、縄文前期や中期といった時期や、地域を問わず、縄文時代全般を通じた全国的な傾向です。この点に着目して、個々の土器や型式の年代的な新旧関係を捉えていくことが大切です。

さらに、在地の土器群に混ざって出土する他地域の特徴を備えた土器（搬入土器）の存在や、在地の土器との形や文様の交合から、他地域の型式と同時代性の比較、検討を進めることも必要です。

北陸・富山県の土器編年

縄文時代のはじまりはいつから？については、研究者の間で意見がわかれますが、少なくとも1万年以上にわたる縄文時代の土器編年は、こうした層位学・型式学的な研究法を駆使して、戦前に「縄文学の父」と称される山内清男先生を中心（やまのうちに）に飛躍的に研究が推進しました。山内先生は、1937年に縄文時代を早期から晩期までの5期に区分した全国的な編年表を発表され、戦後に草創期も含めた6期に改編されました。この編

年表は、研究が大きく進展し、全国の縄文土器が約300型式にまで細分されている現在においても、その大枠は変わっていません。

富山県の縄文土器編年は、1950年代に、山内清男先生の指導の下で、石川県の高堀勝喜氏や富山県の湊農氏ら地元（たかぼりかつきみなとしん）の考古学会の研究者が枠組みを作りあげました。1970年代に入ってから地方自治体の行政関係者による発掘調査の成果に基づいて、その中身を充実させるかたちで今日まで研究が進められ、富山県では、早期の極楽寺式に始まり、前期の蛭ヶ森式、朝日下層式、中期の厳照寺式、天神山式、串田新式、後期の井口式から晩期の下野式に至るまで、約30型式にまで細分化が進んでいます。

富山県における縄文土器型式の変遷、特徴を概観すると次のとおりです。

- ①**草創期** 白岩尾掛遺跡出土の小破片品のみのため、詳細は不明。条痕文系、爪型文系土器の存在から、どちらかといえば東日本地域の影響が強い
- ②**早期** 押型文系土器の存在が、西日本文化の影響、広がりを示す
- ③**前期** 再び関東・東北地域の影響を受けた土器群が広く分布し、東西文化が混交。羽状縄文、木目状捺糸文など多彩な縄文や、細線文、浮線文が発達
- ④**中期** 物語性のある華美で装飾的な形態・文様が発達。東日本、西日本のどちらでもない独自性が開花
- ⑤**後期** 全国的に状況が一変。豪華な土器は姿を消し、沈線文を主体とした土器に変化。前半は関東地方、後半は県西部が西日本、県東部は東日本の影響を受けた土器群が広範囲に分布
- ⑥**晩期** 一般的に東北地方の亀ヶ岡式土器の影響が強いが、後半には九州の突帯文土器の影響が及ぶ

このように、富山県は、縄文時代からまさに東西文化の交流点だったことがよくわかります。



天神山式土器（縄文中期）
（重要文化財：境A遺跡出土品）

型式学研究の課題と可能性

縄文土器の型式学というのは、土器の系統的な変化を捉えて時間軸を定めるものなのですが、その変化の要因、すなわち、集団や文化の不連続の原因は、型式学では解明することはできません。

また、最近は自然科学の発達で詳細に土器の実年代（絶対年代）を測定することができるようになってきました。これにより、一型式ごとの時間幅にかなり差があることや、これまで同時期と考えられていた他地域の型式との間にズレ（時期差）があることが分かってきました。この食い違いをどのように是正して広域的な編年を確立していくのが課題となっています。

逆に言えば、考古学が100年以上をかけて編成してきた縄文土器編年と、理化学的な年代測定値をマッチングすることによって相互検証を行い、世界でも例をみない先史考古学の緻密な時間軸を完成することができます。

おわりに

展示会などで縄文土器の説明を見たり聞いたりすると、必ず「〇〇式」という土器の型式に行き当たります。一般の考古学ファンの皆さんにとって、この土器型式は、難しく、とっつきにくいものだと思います。けれども、縄文文化を探るための重要な手がかり、いわばパスポートのようなものです。型式がもつ奥深さ、その意味を知ると縄文土器の見方がぐっと広がるはずです。

そもそも土器型式は、考古学に携わる人間が、自身の視点で理論的な時間軸の物差しを設定したものです。ですから、〇〇式土器に正解はありません。私がある土器群をA式と言っても、皆さんはB式と考えて構わないのです。

縄文土器の形や文様の美しさ、豪華さに心惹かれるだけでなく、一歩進んで考古学的な見方を学んで各地の遺跡や土器を見学してみると、さらに、興味が湧いて考古学の楽しさが増してくると思います。ぜひ、皆さん自身のパスポートを手にして、縄文文化の魅力をより深く学んでください。

（令和元年11月10日 第4回 県民考古学講座）